

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授承認誌第六二十七号  
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)  
平成十六年六月一日発行(第四百七卷第六号)

# ホトトギス

六月号



旬日記

汀子

平成十五年六月二日 ロイヤル俳壇

見えてくる葉の明るさに柿の花  
当りても当らなくとも競馬かな  
考へて買ひし馬券の外れけり  
競べ馬ありしばかりの森抜けて  
六月七日 芦屋ホトトギス会

予定とはあつてなきもの明易し  
六月十日 大阪倶楽部

庭中の四葩を剪りて来られしや  
この降りの梅雨入となるはあきらかに  
人惜む心寄せ合ひ額の花  
やうやくに降りはじめたる額の花  
降りさうで降らぬ日つづく額の花  
紅さして梅雨入の憂さを払ふべく  
六甲の清流集め蛭とぶ

六月十日 綿業倶楽部

徴退治したるつもりの一三日  
火取虫夜明の荘に果てにけり  
火蛾の稿仕上げ眠りの深かりし  
執拗な徴の仕業と思はるる  
六月十二日 清交社  
風さつと水面走りぬ花菖蒲  
旅先に忘れて来しか梅雨の傘  
予定なき梅雨の家居の経ち易く

降り出して梅雨のハンドルさばきかな  
コーヒーを濃く入れて梅雨籠とす  
大地いま梅雨に包まれゆきにけり  
晴れぬてもどこかにありぬ梅雨じめり  
目に見えて風の去来や花菖蒲  
六月十三日 工業倶楽部

降る雨に色ととのへてゆく四葩  
次の色まだ明すなき四葩かな  
降り出してさみだれ傘の街となる  
葉の色を抜け出してより七変化  
葉の色になり切つてゐて青蛙  
六月十七日 有恒倶楽部

黒南風を抜けて着陸態勢に  
山水の集まるところ蛭の瀬  
句碑を抱く夏野光に包まるる  
俯瞰して夏野の広さ余りけり  
黒南風の沖の水平線隠す  
黒南風を抜け会場の明るさに  
六月十七日 無名会

梅雨茸庭師目こぼしなりにけり  
一汗をかきたることも旅疲れ  
短夜の旅立はやも明けてをり  
夢を見て夢を忘れて明易し  
梅雨茸庭の春秋あることを  
短夜の一人机辺に親しみて  
六月十八日 夏潮旬会  
亀の子に遊ばれてゐる大人かな

亀の子の自由四角の水槽に  
花合歓に雨の二階を開放す  
雨雲ねむの落花をいざなへる  
大ききで見分けのつかぬ鳥の子  
亀の子の時間にしばしつき合ひぬ  
六月二十日 時雨旬会

蟻の道とは切れさうに切れさうに  
夏帽子脱いで忘れて旅半ば  
髪かくすためにもかぶる夏帽子  
新しき仲間涼しき灯の下に  
二百回記念涼しく写さるる  
こんなにも青葉の庭となり果てし  
風渡るときマロニエの青葉より  
六月二十一日 旬会と講演の会

藻刈竿舟に横たへ余りけり  
蟻螂の子とて油断をせし不覚  
六月二十二日 野分会  
白服を白く着こなしこられけり  
山水をここに集めて蛭狩  
六月二十四日 悼鈴木とみ子様  
薫風に誘はれしごと旅立たれ  
六月二十六日 きさらぎ会

風音に紛れなかりし霞雀  
マロニエも楠も加はる木下闇  
一陣の風の消息行々子  
梅雨晴を信じ旅発ち来りけり  
インクビュー受けたる汗の引かぬ間に

# 大晦日

稲畑汀子

つて来ていて、して帰らなければならないのになかなかしないと言う。

「順太、宿題は早くしなくちゃ。お遊びはそれからよ。さあ、今手に持っているゲームは止めて、ママの言うこと聞かなくては」

「うん、もう少し」

「ゲームはきりがいいでしょう。さあ、止めましょう」

「もう少し、これが終わらなくちゃ」

「終わったら直ぐよ」

「うん」

順太の塾のために今年も元旦返しか滞在出来ないと言つて廣太郎一家が帰つてきたのは暮の三十日であつた。  
深二郎は三十一日に帰ると言う。何とか元旦だけでも日本に居る子供達が揃つてお正月が迎えられたら良しとしなければと自分に言い聞かせていた。

「たぐいまー」

子供達の声が家中を駆け回つて居るのかと思つうほど賑やかになつたが、殆ど順太の元気な声である。愛ちゃんはすっかり娘らしくなつて背も伸びて今は殆ど私と同じである。

「愛ちゃんすっかり背が伸びたわね。おばあちゃんと同じじゃないの」

「ほんとーだわ」

「順太も大きくなつたわねえ。小学校四年生ね。お勉強大変なのでしょう？」

「そつでもないよ」

「いいええ、大変ですよ」

ママの真喜子さんの声が遠くから聞こえて来る。塾の宿題を持

深二郎も帰つて来てようやく家族が揃つた。アメリカの娘一家はお正月は帰らないで春になったら帰りたいと言つていた。アメリカは遠い。

廣太郎一家の送つてきた荷物の整理が出来た頃、頼んで置いたおせち料理も届いた。

「よしえさん、有難う。そろそろ京都へ帰らなくちゃ。今年も色お世話になりました。いいお正月を迎えて下さい」

「奥さん、蛤は冷蔵庫の下の引き出しに新聞に包んでありますから」

「分かつてるから。早くしなければ、今年が終わつちゃうわよ」  
「そつさせて頂きます」

よしえさんが帰ると廣太郎が台所に来て晩の食事のローストビーフの準備にかかつてくれた。

大晦日の夕食も済みテレビの紅白を見たい愛ちゃんはビデオの準備をしている。

「順太！ 宿題をしときましよう」

「うーん」

書斎の長椅子に移った順太に声をかけたママにゲームの手を休めない順太の生返事が返ってくる。机に向かう私と向かい合わせになっていて仕事の手を置いて順太を見た。

「順太！ ゲームはお止めなさい」

「うーん」

相変わらず生返事である。

「順太！ー！」

私の大きな声に一瞬大きな目を開けて私を見た。

「え？」

「さあ、ママの言うことを聞きなさい」

「ふうん」

まだ手を止めない。

「順太！ ゲームばっかりしていると頭の中の脳みそが溶けてなくなっちゃうよ」

「え？」

「目も見えなくなりますよ。順太！ 大人になって脳みそが溶けたり、目が見えなくなったらどうするの。大変ですよ」

私の方を見て私の言う度に頷いている。

「さあ、分かったらゲームを止めてママの言うことを聞きなさい」  
「よ」

少し言いすぎたかなと思いつながら私は仕事に戻った。

「言い過ぎたかも知れないけど、あれ、順太はどこへ行ったのかしら？」

「寝に行きました。言っただけ切っ掛けになってくれるといいのですが。ありがとうございます」

と言いつながらクスンと笑う。

「どうしたの？」

「いいえ、順太が『ママどうしてゲームをしたら脳みそが溶けるの？』って聞くのですよ。だからおばあちゃんのおっしゃる通りだと言っただけ置きました。テレビでも言っただけとも」

順太が昨日私の書斎に入ってきた様子、

「おばあちゃんのお部屋はオリオン座だね」

と、言ったことを思い出した。

「あら、何故？」

「天井にオリオン座があるよ」

仰ぐと確かにダウンスライフトが四つある中に三つ並んでいる。

まことにオリオン座である。

「わあ、順太は賢いねえ」

と感心したのは昨日であった。今日はゲームで叱ったけれど、自

分の子育ての時のことを懐かしく思い出していた。

今年も残り少ない時間を家族と過ごせることを嘯みしめながら  
私は残ってしまいそうな仕事の山に向かって座った。

廣太郎句帳

廣太郎

平成十五年六月二日 俊英句会

短夜の列車鎌倉へと急ぐ  
通夜の客去りし聖堂明易し

六月四日 一水会

十葉や裏の生活に慣れもして  
さみだるる心は祝ぎの明るさに

六月五日 蕉心会

賀のありて計のありて六月に入る  
下町の鰻焼く香でありしかな  
下町のビル低からず万緑下  
紫陽花の色目立ち丈目立たざる

ベランダに老鶯鳴かせ住住ひ  
水尾すぐに泡となりゆく涼しさよ  
ひよいと現れ水泳選手めく川鶴

六月八九日 はつびい吟行会

万緑に咲くものの皆従へり  
バス降りてより松蟬の埧塙かな  
松蟬に木々よろめいてをりにけり  
牧涼し黒々と牛横たはり

松蟬に発ち松蟬に着くりフト

楓林を統べて松蟬らしくなり

六月の風楓林を傾けて

白樺万緑の彩りとして

その中に老鶯といふ孤高かな

涼風に唄ふリフトの佳人かな

日表といふ松蟬の音色かな

咲くものの皆微笑みて阜月かな

夏の山森羅万象躍動す

夏蝶の咲くもの移りゆく疾さ

松蟬に二十三人包まれし

はつびいな腫涼しく並ぶ句座

浴びるとは松蟬鳥語風その他

六月十二日 土筆会

小判草風は魔物でありにけり

小判草花咲爺桃太郎

花菖蒲水惑星といふ地球

六月十七日 草木瓜会

夏帽を取り喜びの壇上へ

夏帽を振りて出港せし昔

雨に色風に色解く七変化

紫陽花の濃き方羽音集まりぬ

紫陽花の濃き色を祝ぎ心とす

六月十九日 登高会

蛤蝻に塩一瓶を使ひ切り

柿の花落ちてより色輝けり

五月闇節電進む丸の内

五月闇抜けサヨナラ弾スタンドへ

六月二十日 時雨会

子等が来て蟻が来て甘いものがある

朝光に彩られたる青葉かな

六月二十四日 若水会

船頭のさびきに掛かる鰺その他

鰺釣れて東京湾でありにけり

岩清水山の鼓動として湧けり

帽とりて清水掬ひし乙女かな

大海へ旅の始まり清水湧く

桑の実に彩られたる五山かな

六月二十九日 「円虹」百号記念祝賀会

祝ぎ心とは故郷に梅雨晴に

六月三十日 「円虹」百号記念俳句大会

賀の旅に阜月富士置く車窓かな

夏袴きらと実朝失せにけり

晚涼を回し大倉流鼓

# 雑詠 汀子選

柿落葉わがため植ゑし母偲ぶ  
 龍野 浅井青陽子  
 猪垣のゆるみ確かめ山居かな  
 同  
 長老と云はるゝ余生冬桜  
 同  
 煤払すれば思ひ出逃げさうな  
 神戸 山田弘子  
 貯蓄型浪費型ありお年玉  
 同  
 まつさらな句帳のみどり旅始  
 同  
 おもしろと見るは旅人雪卸  
 東京 今井千鶴子  
 海原に殺生始漁始  
 同  
 成人の日の母たりしこと遙か  
 同  
 大冬晴伝統といふ未来あり  
 熊本 岩岡中正  
 怒り地に満てよ冬木はすくと立て  
 同  
 枯芝のやうにやさしくなれたなら  
 同  
 初鴫や景も生活もあらたまる  
 久留米 中村田人  
 師に会へる紅葉の旅を栞り来し  
 同  
 朝寒の旅に癒えたる自信あり  
 同  
 春立つと立ち上りたる弱法師  
 京都 栗津松彩子  
 弱法師歩けば日脚伸びにけり  
 同  
 昇天の竜の落し子竜の玉  
 同

枝付きのゆたかなレモン寒見舞  
 同 安原 葉  
 薄氷を踏みつけてゆく漢かな  
 同  
 早春の日ざしまだ風織りまぜて  
 同  
 焚火して殊にはかなき萩の燠  
 榎原 稲岡 長  
 焚火中暗き炎は萩ならめ  
 同  
 大寒の背筋伸ばしぬ自ら  
 同  
 正月のはらから集ふ下戸上戸  
 福岡 松尾緑富  
 登お降晴れし城下町  
 同  
 臘梅の香にふれるてふ庭往来  
 同  
 枯野来し眼のにぎはへる美術館  
 熱海 嶋田摩耶子  
 夫も吾も実家もう無し雑煮食ぶ  
 同  
 もしもしで吾と解りくれ初電話  
 同  
 茅茸を染め上げてゆく散紅葉  
 東京 稲畑廣太郎  
 水鳥の尻より浮いて来りけり  
 同  
 掃納猫の額といふ天地  
 同  
 森中に日のちらばれり寒椿  
 八尾 岩垣子鹿  
 風花の大きくなれば止みにけり  
 同  
 いくつかの誘ひ来てをり春隣  
 同  
 梅林に叶ふ二畳の茶室かな  
 姫路 桑田青虎  
 紅梅の一輪の香の峙ちし  
 同  
 四百年の空を尚び梅古木  
 同  
 冬霞木立は海の香に沈む  
 神戸 長山あや  
 下萌に人のこころに今日の雨  
 同  
 科学者の父もこつそり厄落し  
 同

## 雑詠句評（五月号より）

### 佐比売野の秋風となり給ひけり 福山 竹下陶子

昨年 のホトトギス誌にも——佐比売野の寒芹とどき忌に籠る

波多野弘秋——の句を拝見した。さて佐比売野（さひめの）とはどういう所であり、そう名付られたのもよく判らない。友人のついでに検索したり、万葉研究家、俳人、歌人とお聞きして少しづつ判つて来た。縄文噴火により三千年の縄文杉が埋つた霊の宿る大湿原である。——君がため浮沼（うきぬ）の池のひし採ると我が染めし袖ぬれにけるかも 柿本人麻呂（万葉集七ノ一二四九）此場所であろうという事も判つた。片や三千年の縄文杉の生き埋めの地。一方では叙情歌。共に地霊伝説にふさわしい所である。だが何故に佐比売（さひめ）と謂うのか判らなかつた。

お願いしてあつた島根県大田市市役所から連絡が入つた。

——サヒメ族というミコを中心とした小国家があつた。古事記

や日本書記にもあらわれない、辺土の小国家。それも短い年代であつた。サヒメの語源はどうして生れたのであろうか。むかし山頂に陰陽石の陰にあたる石が祀られていたという説があり、女性信仰の地らしく、「小嫁」「狭姫」「小姫」などの字名が残つている。又は親三瓶、子三瓶、孫三瓶の三峯「さんひめ」として生れたのかも知れない。更に佐比売山を「ちび姫山」と呼んでいた地方もあるという。佐比売の「佐」は助けるとか水をあらわす言葉で、早苗、早乙女、さなぶり、であり、水の信仰かも知れない。三千年の縄文杉の骸の上にこれらの物語がくりひろげられているのであつた。

今回の句は井上哲王君を追悼した陶子君の句であるが、「秋風」という季題のせいか、成仏しきれないだろうが、成仏してくれと願つている祈りが感じられ尊いと思う。大変それた句評になつた事をお許しいただきたい。（明倫）

石見地方は古くから伝説が多くある場所で石見と出雲の境に位置する三瓶山は古くは佐比売山でここに杭を立てたという国引きの故事がある。美しい草原が裾野をなすこの一帯は佐比売野とよばれ、この地を愛して来られた亡き井上哲王様を偲ぶ一人として秋の佐比売野を渡る風となられたと感じた作者の思いが深く伝わってくる。松虫草や夕菅など咲く花野に待む哲王様が彷彿と見えてくる。（汀子）

# 若水集

## 廣太郎選

早春・白魚

早春の風に潜んでゐる敵意 滋賀 古賀浪路  
 早春の今日の日和を信じ得ず 同  
 自負心のぐらつきやすく早春も 同  
 喧騒の底に白魚生きてをり 千葉 増田善昭  
 灯の下に白魚透けて沈みけり 同  
 玉の緒の絶えて白魚影細し 同  
 白魚の目玉が寄つてをりにけり 半田 榊原百合子  
 早春の土手にオカリナ吹く少女 同  
 早春の雲むらさきにたなびきて 同  
 早春のオリオンにある帰心かな 鹿兒島 青野迦葉  
 早春のすばる艶めくものとして 同  
 早春の乙女座すでに色香持つ 同  
 明眸のほか白魚に無かりけり 昭島 下田青女  
 血の色をもたぬ白魚かなしめり 同  
 早春や金糸雀色の娘が土手に 同  
 白魚を水の如くにこぼしたる 神戸 木村淳一郎  
 水に溶けまいと白魚泳ぎをり 同  
 水よりも白魚がよく濡れてをり 同

住み古りしこの小城下の早春に 龍野 浅井青陽子  
 早春の山居の庭に虚子憶ふ 同  
 大橋の真下辺りの白魚舟 同  
 みちのくの風まださむき白魚川 弘前 中村鎮雄  
 白魚に白魚の影横切りけり 同  
 未だ魚影うすしと思ふ白魚川 同  
 泡乗せて白魚の潮差し来たる 広島 安倍いさむ  
 かばかりの風に白魚見失ふ 同  
 砂に失せ藻に廻りゆく白魚かな 同  
 溜めてゐし早春の日の跳ねる屋根 高松 白根純子  
 大屋根の反り際立てるしよしゆんかな 同  
 眩しさの未だ尖りゐるしよしゆんかな 同  
 早春の湾処にはやも釣仲間 大阪 辻 千緑  
 早春の土手ゆく歩数かぞへつつ 同  
 旅心もて早春の奈良町に 同  
 早春の香炷きこめし大広間 神戸 千原叡子  
 紙鍋に白魚煮えて湖畔亭 同  
 早春の光にはやる犬曳いて 同  
 白魚に透けて太古の水の色 愛媛 浜永宗一  
 白魚の白さへ持たぬ潔さ 同  
 引き上げて躍る光の白魚網 同  
 はやばやと白魚漁の入札に 唐津 堤 劍城  
 白魚守藻屑の動き見逃さず 同  
 早春の教会の鳩狙ふ猫 同

## 若水集句評 廣太郎

早春の今日の日和を信じ得ず 滋賀 古賀浪路

丁度これを認めているのは平成十六年の三月三日であるが、東京は寒の戻りで冷え込んでいる。もう「早春」というには遅い筈であるが、何かこの句を見るとふとこの時期の気紛れな天気のことを感じてしまう。季題の微妙な季節感を自身の心持を通して見事に詠んでいる。

玉の緒の絶えて白魚影細し 千葉 増田善昭

食卓の上に並んでいる「白魚」の料理だろうか。それとも水槽の中で死んでいるのかも知れないが、「影細し」という表現が何とも哀れな響きを伴って伝わってくる。却って季題本来の美しい形も見て取れ、「玉の緒」という詩的な言葉により上品な作品として 仕上げられて いる。

早春の土手にオカリナ吹く少女 半田 榊原百合子

最近筆者は「オカリナ」にはまっている。だから採った、とい

うわけではもちろんないが、あるホトトギスの地方大会で一人のオカリナ奏者との出会いがきっかけなのである。詳しく述べると誌面が足りないが、プロの音色の美しさは喩えようがない。正に「早春」はオカリナの音色なのである。

水に溶けまいと白魚泳ぎをり 神戸 木村淳一郎

何ともユニークな表現であるが、「白魚」の姿が的確に伝わってくる句である。生きている時はほとんど透明に近い色で、正にこの句のようにまるで水に溶けてしまっているのではないかと思うほどである。ピチピチと躍動感溢れる泳ぎっぷりも豊かに見て取る事が出来る。

住み古りしこの小城下の早春に 龍野 浅井青陽子

この作者であつてこそその作品である。御歳の事を申し上げると失礼だが、九十台半ばにして現役で大会社を経営しておられ、矍鑠、いや澆刺と句会にお出ましになる作者である。さりげない表現の中に、季題を通して人生をしっかりと見通していらつしやる姿勢は筆者も見習う事多々あるのである。